

最新線
インタビュー

内視鏡を使ったロボット手術が注目されている。心臓外科の最先端治療として登場、切開を避け痛みが少なく回復も早い。金沢大学、東京医科大学の渡邊剛教授は、ロボット手術を扱う医師。神の手として先進医療に挑む。

—高度な技術力によって、心臓外科手術もかなり進化しましたね

その通りです。最もよく知られているのが、内視鏡を用いて行うバイパス手術。1967年に初めて行われ、患者さんの負担を軽減する低侵襲治療の一環として医療界の発展に貢献しています。私自身が行う心臓手術は年間約400例扱いますが、うち約250例がバイパス手術です。心臓を止めずに細い血管をつなぎ合わせる手術を行っています。

金沢大学医学部教授

わたなべ 渡邊 剛氏



心臓外科の最先端「内視鏡ロボット手術」

—患者にやさしい低侵襲治療の典型が、いま話題のロボット手術ですか

間を中心に4カ所ほどの小さい穴を開けて行うので痛みもなく簡単。回復も早く1日の入院で退院するケースもあります。

腕があり、1本がカメラで患部を撮影し残り2本が私の手になり、手術室の片隅から操作します。このため目と腕の微妙な感覚が難しく、繊細な技術が問われます。しかし手ぶれなどは、デジカメの手ぶれ補正装置があり心配ありません。手術に必要な時間は平均3時間程度。先日も89歳の男性を手術しましたが、4日目で元気に退院されとてもうれ

しい。健康を取り戻すことが仕事の使命。どこでも要請があれば時間が許す限り、ロボットがある病院に向いて手術を行えますよ。

(速水洋一)

—先生は早くから、この手術を率先して行っていますね

ロボットの普及を予測して3年間アメリカのトレーニングセンターで研修しました。05年から始めて、これまで80例実施しています。ダヴィンチには3本の腕があり、1本がカメラで患部を撮影し残り2本が私の手になり、手術室の片隅から操作します。このため目と腕の微妙な感覚が難しく、繊細な技術が問われます。しかし手ぶれなどは、デジカメの手ぶれ補正装置があり心配ありません。手術に必要な時間は平均3時間程度。先日も89歳の男性を手術しましたが、4日目で元気に退院されとてもうれ